

---

# ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード 8: ゲイ入門！(Secret)

栗須じょの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ゴーリーク・ラブストーリー」／エピソード8：ゲイ入門

！（Secret）

### 【ZIPPED】

N6439C

### 【作者名】

栗須じょ

### 【あらすじ】

サマーバカンスで、ティーンが隣の女の子に気をとられていることにポールはカンカン。こういうことは自分が“真性ゲイ”ではないから起こることだと悩むティーンに、ローマンは“ちゃんとしたゲイ”になったほうがいいと、“ゲイのなかのゲイ”を紹介してくれることに。ポール以外の男とデートすることになつたティーン。待ち合わせの場所に現れたのは……。

## (前書き)

いかがは 一話完結のシリーズ物 につき、ヒッソード第1話から  
お読み頂けると分かり易いと思います。  
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

「　　どう思う?」  
「……テロリスト」  
「　　そうか……こっちは?」  
「　　ドラッグの売人」  
「　　これは?」  
「　　禁酒法時代のギャング?」  
「　　これ」  
「　　ジョン・レノンのマニア」  
「　　じゃ、こっちだ」  
「　　テロリスト」  
「　　またテロリストか……どうして悪者ばかりなんだ?」  
「　　きみが選ぶものはどうしてかカタギには見えないんだよね。ヒゲのせいってわけでもないんだろうけど……これはどう?」  
　　以上の会話から、おれとポールが何をしているかを当てることができたら大したもの。  
　　今おれたちがいるのは14丁目のアイウェアショップ。この夏、むりやり勝ち取った連休をビーチで過ごすべく、その準備に追われている真っ最中。と、いうわけで設問の答えは　バケーシヨン用のサングラスを物色しているところ。

　　ニューヨーク郊外のリゾート地、ファイア島。複数の友人同士で家賃をシェアしている別荘で、おれたちは初めて、ふたりきりの旅行を体験する。海まで五分、一番近いレストランは一十分。車の乗入れすらも禁止されている環境の中、都会の垢を落としまくり、心身ともにリフレッシュできることを思えば、出発直前までの残業すらも何ら苦痛たり得ない(と、思いたい)。

　　とつかえひつかえサングラスを選ぶ。旅行の準備はとても楽しい。ひょっとしたら旅行そのものよりも楽しいんじゃないかなって思える

ほど、準備段階はエキサイティングだ。

「まじ、これはいいんじゃない？ 鏡見てじゅうたよ」

「どれ」

ミラーに映るクールガイ。さすがは我が恋人。いい見立てだ。

「どう見える？」

「スーパー モデル」

「よし、これにじゅう」

旅行の準備はとても楽しい。そう、準備段階まではとても……。

「ほんとあきれた。いつたい何なの。どうこうつもつでそんなことを」

「どうこうつもつもない。別に悪気はなかつたんだ」

「あつてたまるもんですか。あなた、テンプレーション・アイラン  
ド\*に流されたら即脱落するタイプでしょ」 (\*テンプレーション・  
アイランド=カッブルが南の島に軟禁され、魅力的な異性から迫ら  
れても愛を貫けるかどうかを試すテレビ番組)

以上の会話から、おれとローマンが何をしゃべっているかを当て  
ることができたら大したもの。ちなみに今おれたちがいるのは、ヴィ  
レッジにある行きつけの飲み屋。

「“悪気はなかつたんだ”なんて、言い訳としちゃ終わつてるわ。  
人に詫びるならもうちょっと誠意あるコメントが望ましいんじゃない  
くて？」

正論ぶちかますローマン。わざほどいの設問の答えは「うだ バ  
ケーション中のディーンの失敗について告白、及び説教を食らつて  
いるところ

ファイア島での素朴な生活。地元のマーケットで新鮮な野菜を買  
い、持ち込んだワインの栓を抜く。となりのコテージには、同じく  
マンハッタンからの女性が一名。海に太陽が落ち始めた頃、生け垣  
の向こうから、彼女たちがおれに声をかけてきた。

「今夜のディナーを一緒にいかが?」

おれは答える。「ああ、いいね」

その夜、おれとポールは女の子たちと和やかにディナーを……過ごしたりはせず、ただひたすらに言い合いでいた。乐しかるべきバカンス。初めてのふたりきりの旅行。それは喧嘩に彩られ、ちよつとやそつとでは忘れられないであろう、ちつとも素敵ではない想い出となってしまった。

「ポールはふたりつきりでゆつくりしたかったのよ。誰にもじやまされずにね」ローマンはつんと鼻を上に向け、カクテルを口にする。「彼女たち、バーベキュー用の肉があまつて困つてるって言つたんだ。男の人に手伝つてもらわないと食べきれないって」

「馬鹿ね。そんなのボーカントの見え透いた手口よ。その子たち、バーベキューと一緒にあんたたちのお肉も食べちゃおうつて魂胆だつたに決まつてるわ」

「下品なこと言うなよ!」

「可愛かつたんでしょ」

「なに?」

「その娘さんたち。美人だつたんでしょ」

「ああ、まあ……」

“ああ、まあ”といふのは控え目な表現かもしれない。彼女たちは金髪で、肌は陽に焼け小麦色。体格は小柄だが、胸は大きい。浜辺の一軒家で自炊するのが向いている感じではなく、シンプルライフの企画でここに押し込められたような、そんな“娘さんたち”だった。

「もし美人じゃなかつたら、そこまでの喧嘩には発展しなかつたでしょうね」と、ローマン。

「彼女たちが美人だからポールがヤキモチ焼いたつてのか? もしブスだつたらなごやかに終わつてた?」

「そうじゃないの。そもそも発端はあんたなんだから。もしその子たちがブスだつたら、あんたはなびかなかつたでしょ? 美人だ

からあんたは誘いを受けた。ポールは恋人の下心に反応して腹を立てた……そういうことよ」

“まったくその通りだ”とは言い難いが、“まったくピント外れだ”とも言えない意見。ノーロメントになるおれに、ローマンは哀れっぽい、芝居がかつた声を出す。

「ポールが可哀想。こんな馬鹿でスケベなストレートの男に惚れたばかりに……」

「ああ、そうだろうよ。悪いのはいつもおれだ」

「あら、この人つたら。スネて開きなおつちやつたわ」「確かにおれが悪かつたよ。でも自己弁護させもらえば、おれだって……自分が普通のゲイだつたらこんなことになつたり、ましてやこんな風に悩んだりなんてしないよ」

「どういうこと?」

「ビーチに行つても、おれは女の子にしか感じない。でもおれはポールが好きで、彼とつきあつてる。ゲイじゃないのに男とつきあつて、セックスまでしてるんだ」

「そうね、あんたはゲイじゃないわね。あたしを見てもなにも感じないんだもの。あなた病気よ」

「きみを見て感じるようになつたら、そのときこそ病院に行くよ」「減ららず口に突つ込むわよ」

「突つ込む? なにを?……あ、いや、言わなくていい」

「あなたの審美眼はどうかしてるのね」

「おれだつて、きみがハンサムだつてのは認めてるよ。知らずに見たら憧れすら抱くかも。けどそれもきみが口を開くまでのことだ。きみのしゃべり方ときたら、すっとんきょううなゲイそのものだからな」

「あらそ、黙つていればいいわけ?……こんな感じ?」

言つてスツールの上でこれみよがしに足を組み替える。カウンターに肘をつき、手で顎を支え、その視線は遙か遠い彼方へ。形のいい鼻、深みのあるヘイゼルの瞳。綿糸のようなダークブロンドと、

キャラメル色に磨かれた肌。ミケランジェロが創造したと言つても差し支えないような美の傑作がそこにいた。

「あああ！ 馬鹿くさい！」 バーテンダーがびくつとするほどの大聲を出し、居住まいを戻すローマン。

「とつてもやつてられないわ！ 意味もなく不機嫌そつこじしているなんて真っ平！」

「そう、これがいつもの彼。巨匠も魂を入れ忘れたというわけだ。  
「30秒も黙つてられたのは新記録じゃないのか？」

「そんな記録、別に伸ばしとうございません。あたしのおしゃべりもあたしの一部よ。仏頂面のモデルみたいにはしていたくない。自分を隠してまでして他人に気に入られようなんて思わないわ。いつも自分自身でいて、人生を楽しむのがローマン・ディステイニーのモットーなんだから」

「“いつも自分自身”。そのアイデンティティがあれにはもうよくわからないよ。ポール以外の男に性的に感じることはないし、こういうのはなんて言つんだろう？」「

「バイセクシャルでいいんじゃないの？」

「ちがうだろ？ オレは男と寝たいなんて思わない。きみは自分自身でいることに躊躇はないよな？ ゲイであるといつアイデンティティにおさまつてることに疑問もない」

「ええ、そうね」

“あるひとつ性別のみを愛す種族” って点において、ゲイはストレートと同じ立場にあるんだよ。でもおれはどうだ？ そのどちらでもない。かつては完全なストレートと言えたけど、今はかなり微妙な立場に置かれていて、その状態がおれにはどうも中途半端な感じなんだ

「なにが問題なの？ あなたたちうまくいってるじゃないの」

「ポールとのことじゃない。おれ自身のことさ。自分が何者かわからぬことには、どうにも落ち着かない」

「どうもあなたの悩みは具体的じゃないわね。何が問題で一体どう

したいって言うの？」

「それがわからないのが問題だ」

「そういう人が多いからニューヨークの精神分析医はベンツを持てるってわけなのよね。悩むのもいいけど、『掘るべき穴』と『掘らずともよい穴』の区別はつけておかないと……あら失礼、メールが……」と、点灯する携帯を取り出し、それを開く。

「やあん、ショーンからよ！ 明日の夜はヒマか？』ですって！ 明田はアレックスの舞台を観に行かなきゃならないのに！ 一年は365日もあるのに、なんだって重なるのかしら！ ビッシュよ！ 悪むわ！」

「……………悩めよ」

所詮この男にはおれの気持ちなんてわからない。そもそも彼はゲイであり、おれの恋人もそれに同じ。おれに共感できる者がいるとしたら、それは『ゲイの恋人を持つストレート』なわけだが、そんなヤツがそういうとは思えない。

ぱちぱちと返信を打つローマン。携帯をぱたんと閉じて、再度おれに向き直る。

「解決方法はひとつだけ……ゲイにおなりつー！」

「無茶ゆーなー！」

「何が無茶よ。そもそもあんたポールの“彼氏”じゃないの。女なんかスッパリあきらめて、ちゃんとしたゲイになれば、ポールも安心、あんたも苦しむことはない。世界中の女たちにも平和きわまりない状態が訪れる。どう？ それがベストな解決方法じゃなくって？」

「そうかもしれない。この苦しみの原因は、おれが『自分はストレートだ』というアイデンティティを持っているからだ。しかし『おなじ』と言わせて、そう簡単になれるものではないがゲイの道だ。おれがそう訴えると、ローマンはうなずき同意した。

「さあね、このあたしにもなびかないんだもの……」これはちょっと難しいかもねえ」

“残念ですが、手のほど」じょうがありません”、そういうことか？」

「どうかしら……」と、考え込み「んー　いい」と思いついた」と、目を見開く。

ローマンの“いいこと”とは、たいてい妙なことだというのは、この付き合いのうち嫌というほどわかつていたつもりだったのだが、自己のゆうきに苦悩するおれの判断能力は、このとき著しく低下していた。

「あなたにある男性を紹介してあげましょう。その人に会って話を聞いてごらんなさい。きっと何か得ることがあるはずだから」

「なんだそれ？ カウンセラーか？」

「そうじゃないわ。ただの素敵な大人の人。とっても素敵なゲイの男性。彼のことを“ゲイのなかのゲイ”って表現する人もいるほどよ」

「ゲイのなかのゲイだつて?……ああ神様」

ボリスハットにレザーのショートパンツ、黒々とした口ひげを蓄えた大人の男。もしくは海兵隊の格好をした、ぴったりとした半ズボンの……。

「ちょっと……なんか違うの想像してるでしょ！　あたしのセンスはそんなんじゃありませんからね！」おれの頭のなかを覗きでもしたかのようにシャウトする。

「ゲイの中のゲイに手ほどきしてもらえてのか？　正しいゲイになるために？」

「魅力的な人間に成長するのにゲイもストレートも関係ないわよ。ねえ、あなたのまわりに魅力的な大人の男性ついている？」

「いるさ。おれだ」

ローマンは“冗談やめて”と言うように、顔の前で手を振った。

「そうじゃなくって、もつと年上の、手本になるような大人の男のことよ。どう？　いないでしょ？」

たしかに。そういう男性はおれの周囲に存在しない。そもそも“

男性”自体の存在が希薄なのだ。おれの父親はおれが生まれてすぐ  
に他界している。母親と姉に可愛がられて育ち、成長後は女性が七  
割を占めるオフィスに働き、そこでは女の上司に“可愛がられてる  
”。おれの人生は女にまみれてる。こないだまではありがたいこと  
だつたが。

「現代のアメリカには若者の手本となる大人つてものがいないのよ  
ね」と、ローマン。「ネイティヴ・アメリカンの社会や古代中国に  
は必ず先達というものがいて、その生き方を見せる事によつて、  
若者が社会のなかで育つていく環境にあつた。でも今、この国でそ  
ういう人を見つけるのはとても困難なことになつてしまつたと思う  
の。ヒーロー やヒロインは架空の物語のなかだけに生きている。そ  
れつてあまり幸福なことは言えないわ」

その意見は確かに一理ある。おれが素直に同意すると、ローマン  
は「どう? “すつとんきょうなオカマ”もたまにはいいこと言つ  
でしょ?」と、唇の端をくいと上げた。

「“オカマ”なんて言わないよ」おれは苦笑し、カクテルのチエリ  
ーをつまみ上げ、彼のグラスに落とす。ローマンは満足そうに微笑  
み（それは本当に美しかつた）言葉を続ける。

「みんなすぐ“ゲイだストレートだ”って大騒ぎしたがるわよね?  
そういう観念と未知のものに対する怖れが自分自身の世界を狭め  
てしまつていて……ねえ、そう思わない?」

“みんな”という柔らかい言い方を彼はしてくれたが、“ゲイだ  
ストレートだ”って大騒ぎしてるのはおれのことにはならない。お  
れはつまらないことにこだわつて、ぎやあぎやあ騒ぎ立てる、固定  
観念でいっぱいのストレートってことなんだろうか。

「それで? 世界を広げれば“パーフェクトなゲイライフ”が手に  
入るつてのか?」

指摘された恥ずかしさも手伝つてスノップに言い放つおれに、ロ  
ーマンは忍耐強い態度を続けてくれる。

「何度も言わせないで。ゲイとかストレートとかは関係ないのよ。

ただ単に“素敵な大人の友人をあなたに紹介しようか”って言つてるのに。まあ、嫌だつていうなら無理強いはしないわ」彼はここで言葉を切り、「どうする？」と、おれの顔を見つめて言つた。  
どうするかつて？ 答えはもう決まつている。

社会的に成功している地位にあつて、カミングアウトしている大人的の男。ミコージシャンやアーティストにはそれも少なくないが、一般企業の中で同性愛者を宣言するのは、かなり勇気のいることだ。サンフランシスコのベイエリアや、このマンハッタンにおいて、社内にゲイを探すのはそう難しいことではないが、上場企業の会長クラスとなると、こうした人間をおれは知らない。政治家にもゲイはいる。しかし高い地位に就任できるかと言えば、それは女性が大統領になるのと等しく困難なことだらう。

これから会う男はゲイというアイデンティティに生き、この男性社会でひとかどの地位を築きあげた大人物。そのこと自体は素晴らしいと思うが、おれ自身“手本になるような大人の男”を求めているわけではないし、ましてや“とっても素敵なゲイの男性”にワクワクする資質も持ち合わせてはいない。この話に乗つたのはただ単にちょっとした好奇心から。“ゲイの中のゲイ”つてのがどんなものか興味もあつたし、“ゲイの中のゲイ”には、いくつか聞いてみたいこともある。

相手が指定してきた待ち合わせ場所はワシントン・スクエア近くのバー。そう広くはない店内。カウンターと小さな丸テーブル。ほどよい音量で流れるジャズは、たつたひとりだけいるバーマンの趣味なのだろう。無駄な装飾はいつさいなく、鈴色になつた柱や椅子が静かに存在を主張する。しつらえのすべてがヴィンテージとなつた（バーマンもだ）この店が、観光客のたまり場となることから救われているのは奇跡に近いことのように思える。古き良きアメリカ。愛すべきオールド・カントリー。こういうのが“ゲイの中のゲイ”

の趣味なのだろうか。だつたらおれでも共感できそう。少なくとも、ここからレザーのショートパンツ男は連想しにくいといふものだ（ほほ）。

カウンター席のすみっこに腰を落ち着け、まだ見ぬ男を待ち続ける。このセッティングはローマンを通して行われ、おれは相手の顔も声も、メールアドレスさえ知りはしない。指定された待ち合わせ時刻はとうに過ぎ、腕時計のルーレットでひとり遊びをして時間をつぶすが、ほどなくしてそれも飽きる。時間が経つにつれ、落ち着かなくなってきた。入り口の扉が開くたび、緊張の度合いが増していくような気がする。なんたって男とのブラインド・デートは初めてだし、しかもそれが“ゲイの中のゲイ”ときた日には……。こうしてスツールから入口を眺めていると、入ってくる客の全員がゲイに見えてくる。もしかしてここは“そういう店”なのか？だから観光客も寄り着かない？……ああ、それは考え過ぎつてもんだ。こういうのがおれの悪い癖。ルーレットでもやつて頭を空っぽにしておこう。いづれ相手はやつてくるんだから。

無心に腕時計と勝負を続け、架空の相手とハ勝五敗になつたあたりで、「ディーン？」と声をかけられる。おれがそうだと答えると、「待たせてすまない」と、詫びを口にする。遅れて現れたのは五十がらみの長身。待たされた腹立ちもあり、おれはそつくなく「お仕事がお忙しいんですか」と、訊ねる。

「いや、仕事じゃない。ジムで泳いでいたら、うつかり時間を忘れてしまつて。本当に申し訳ない」

“プールで時を忘れる、大人の男” エスクワイヤ の  
よつなコピーが浮かぶ。

名乗った男はハリー・フランドル。“フランダース”ではなく、“フランドル”というあたり、ルーツに高貴さが感じられる。おれが「フランドル」と呼びかけると、「ハリー」と訂正を入れるのは、これが会社の付き合いではないことを意味している。

ハリー・フランドルはグレンリベットをオーダーした。「数字の

大きい方で」と、付け加えると、マスターは「かしこまりました」と、唇の端を微かに上げて見せる。

“数字の大きい方”、それは殺しの暗号。いや、そんなわけはない。となりに座っているのは〇〇七の登場人物じゃないんだから。それどころか、何と言つか……“ゲイの中のゲイ”はついぶん普通に見えるじゃないか。面食いのローマンがあんなにも褒めあげるんだから、さぞかし美男子だろうと思つていたのに、アテが外れた。てつきりジョージ・クルニーのような男がやつてくるかと想像していたのだが。

この店の常連とおぼしき彼がマスターと親しげに話す間、おれは彼を観察する。しつかりした目鼻立ちはイタリアン・アメリカンを思い起こさせるが、名字がフランス風なのでイタリア移民ではないだろう。アンティーケブラウンのスーツ、タイはしていない。よく見るとジャケットとパンツは別モノだ。この着こなしからすると、ジムの更衣室でうつかり他人のジャケットを着てきてしまった、というわけではないだろう。同系色の上下を別にするのは一歩まちがえるととんでもないことになるが、彼は上手にこのハズシ技をやってのけている。どうやらかなりの洒落者らしい。品のいいスーツでも隠しきれない肩の筋肉。これは水泳のたまものか。バタフライのあとにデートの予定を入れるなんて、この年齢にしちゃ大したもの。おれは28だが、そんな気力はとてもない。

ハンフリー・ボガードに酒を作つてきたようなマスターが、静かにグラスを滑らせる。ハリーは「新しい出会いに」と、軽くグラスを持ち上げた。嫌らしくかちんとぶつけるなんてことはしない。袖からチラリと見えた腕時計はトゥールビヨンのブレゲ。さすが実業家。おれとはまるつきりケタが違う。こっちもかなり頑張ってきたつもりだが、張り合つだけ無駄。おれのは高級品、彼のは芸術品だ。おれが酒を口にするのを見て、「気に入るといいが」と、ハリー。おれは頷き、「おいしいです」と、コメント。いういふときにウンチクをひけらかす輩を軽蔑してはいたものの、あまりにも無知とい

うのも些か恥ずかしい。おれは酒にあまり強くなく、その知識も同じ。数字の大きいグレンリベット。たしかに旨いが、これは一杯が限度だらう。

「おれにはひょっと強いみたいだ。水で割つてもいいですか」「もちろん」

“分別のあるものはウイスキーをストレートで飲む”と言いますけどね”定説を唱えるおれに、「その説はわたしに言わせれば、何の根拠もないことですよ」と、マスターが口を挟む。ハリーは「この水は良質な天然水だ」と教えてくれる。「アルコールにあまり強くないのであれば、割ることによつてもつとおいしく飲めるよ」優しい笑顔で「リベットにはジョージーかな」と言うハリーに、マスターが口ひげを動かした。

「チエイサーでしたらマザーウォーターと同じでもいいかもしませんがね。こちらの方が飲まれるのであれば、軟水の方がよろしいかと……」

「ああ、わかった、わかった。好きにしてくれ」手を振り、笑うハリー。マスターも微かに微笑みを見せる。何のことやら、おれはさっぱりわからない。わからないが、なにかひとついい。これはもう相手にまかせたほうがよさそうだ。

水を足され、薄まつたアンバーに口をつける。それはハリーの言った通り。ちょっとと薄めただけで、喉ごしがよくなつたばかりか、香りもわかりやすくなつた。豊かな芳香に心が休まる。緊張を解くには酒の力を借りるのがベストというのは、定説中の定説だ。

互いの職業を軽く紹介し合つたところで、おれは彼に“いつたい

どうやって成功をおさめたのか”という趣旨のことを質問した。

「わたしは運がよかつただけだ」ハリーはそう言つて酒を口に含んだ。答えは簡潔。あまりにも短い。“運がよかつただけ”なんて、

もちろんそんなことあるわけがない。こいつはずいぶんと謙虚なメントだ。ちょっと格好悪いまでに謙遜してくれるじやないか。

「なんだかビジネスウィーク読みみたいな質問だね」と、ハリー。

“

みたいな”と言つからには、その筋から質問を受けたことがあるのかも。

「そんなことがきみの聞きたいこと?」と、眉を上げる。

ああ、そうだ。そうじゃなかつた。ここにはビジネスのノウハウを聞きにきたんじゃない。おれにはもつと切実な問題があつて、その助けになるかもつて話で、今日はここにいるんだつた。

「あの……ちょっと立ち入つた質問をしてもいいですか?」

「立ち入つた質問

なにかな?」

「あなたはいつからゲイなんですか?」

突然の質問に、ハリーは目を見開く。それからグラスを見つめ、ぽつりと「十五年前だ」と、静かに答える。

十五年。それは思ったより最近だ。彼はぱつと見、五十は過ぎてるから、そうすると三十代後半に入つてからゲイになつたという計算になる。

「それ以前はストレートだつたんだよ。だが妻をお産で亡くしてね。わたしがゲイになつたのはそれからだ」

「えつ? それは……今まで奥さんを愛していたのに? そんなふうにいきなりゲイになれるものなんですか?」

「うん、そう。妻を亡くしたのはそれで三度目だから」

「三度目?」

そう聞きかえすと、カウンターの向こうから突然、怒声が飛んできた。

「この意地悪のくそジジイ! 坊やが目を丸くしているじゃないか!

!」

おれは目を丸くした。物静かなハンフリー・ボガードのバーマンが、不似合いな言葉でハリーを怒鳴つたので、びっくりしたのだ。

マスターに注意をひかれたため、言葉の意味がすぐには飲み込めない。ハリーは笑いをかみ殺している。その表情が目に入ったところで、自分がからかわれたことに、おれはようやく気がついた。

「ハリー、ひどいですよ。そんな冗談を言うなんて」

「いやいや、すまない。だがきみも失礼だぞ。“いつからゲイか”など、初対面の人間に聞くべき質問ではないと思うが？」

言われてみればその通り。ここは酒の力を借りすぎたかも。おれが謝罪すると、彼はにっこりと笑い、「ではちゃんと答えよう」と、背筋を伸ばした。

「わたしのゲイは生まれつきだ。妻を持つことなど一度もないよ。これで満足かね？」

わたしのゲイは生まれつき。。。生まれつきダンスが上手、生まれつき絵が上手。生まれつきハンサム、生まれつきゲイ。これはどうしようもないことなのだろうか。なんだかストレートであることがハンディキャップのように思えてきた。

「途中からゲイになるのはまれなんでしょうかね？」

「わたしの知る限りでは少ないね。女性と結婚した後にゲイに目覚めた、なんて話も聞くが、それは単に自己認識する前に女性と結婚したに過ぎないとわたしは思う。自分がゲイだと自覚するのは必ずしも思春期だとは限らない。中年にさしかかってから、よつやく己を発見する者もいるんだ。それが早いか遅いかの違いだけだね。だからストレートだったものが、途中からゲイになるとほ考へくいよ」

「がっかり？　ばんざい？　おれはどうこうリアクションをとればいいのか。黙つてグラスを見つめていると、カウンターの上にあるおれの手に、ハリーがそつと触ってきた。

きた　　。おれはそう思い、身を硬くする。落ち着け。服をむしりとられたんじゃないんだ。手を触られたらうりでビクビクするなつて。

「“カサエルのものはカサエルへ”と、ハリー。おれの指輪に指先で触れ、「このマインはーシュケルだ」と言つた。

「シユケル？」

「シユケルはローマ時代の通過単位だ。銘はジュリアス・シーザー。聖書によく登場する貨幣だよ。“カサエルのものはカサエルへ”

キリストの有名な台詞はこの貨幣だ。ジーザスはそう言つて、

税金を払つことに同意したんだ」

「一シェケル……そこまで注意して見ていなかつたな。アンティークのコインを加工したものだとは知つていたけど」

「実業家は金にめざといんだよ」

教養を冗談めかすハリー。うんちくを垂れても少しも嫌味ではない。ひとつアクセサリーからこんな教養が飛び出すとは大したものだ。ローマンだったら『あら、どこのブランド?』とか言つところだけだ。

「紀元一世紀頃には、これ一枚で百ドルくらいの価値はあったはずだ。今から一千年も前、これはキリストの手のなかにあつたかもしれないコインだよ。それが今きみの指にはまつてゐる。これまでどこをどう旅してきたのか……実際にロマンがあるじやないか」

男のロマン。ロマンティック。おれはもしかして口説かれているんだろうか。

「きみのきれいな指によく似合つてゐる」

そう言つてハリーはおれの手から、さつと手を引いた。決定。おれは口説かれている。それにしてもなんてうまい口説き方だろう。手に触るにしてもこれなら自然だし、聖書についての話題と一緒になら、少しも嫌らしくならない。そしておれの手を褒めたところで、手をどけた。こっちが意識したところで手を引く。これは駆け引きだ。実業家の手腕おそるべし。ビジネスウィーク誌に載る男は、口説きのテクも財テクと同じぐらい得意なのだろう。

ウイスキーの杯を重ねるハリー。こつちは一杯目からカクテルに変更。柑橘系のさっぱりしたものをと考えていると、ハリーは“シヤンパン・ア・ロランジエ”はどうかと、おれにオーダーしてくれた。聞き慣れない名前のそれは、出されてみれば何のことはない、“ミモザ”的名前だつた。このカクテルは名前の通りシャンパンベースで、たつた一杯のために一本のボトルを開ける、とても贅沢なものとして知られている。

景気のいい音をたて、抜かれたシャンパンの銘柄はドンペリ二〇。マスターがボトルを手に取った瞬間、血の気が引いたが、今日は頼もしい男がとなりに座つてゐるのだからと自分に言い聞かせ、喉まで出かかつた叫び声を押さえることに、からくも成功する。

おれがトイレに立つてゐる間に支払いを済ませたのか、はたまた店のツケにしてあるのかは不明だが、とにかく会計に関しては、心配していたようなことにはならなかつた。腕時計を置いてくる」ともなく、おれたちはスマートに店を出る。

裏通りは藍色に色を替え、『食べられません』の表示がされた生ゴミ入れも、今の時間は異臭を放つでもなく、大人しく沈黙している。

本物の大入しかることのできないバー。高価な時計と高級な力クテル。普段見ることの出来ない世界を垣間見れたのは確かに収穫だが、ローマンはいつたいおれに何を体験させたかったというのだろう? 口ひげのポリスハット、半ズボンの海兵隊、男好きのジョージ・クルーニー……。今日の出会いはそんなものじやなかつた。

“ゲイであつても思つたより普通”。それが今のところまでに得た真理で、ゲイの中のゲイとのデートは思つたよりもノーマルだ。表通りに出る道を並んで歩いていると、「きみは始終わたしを值踏みしてたね」と、唐突にハリーが言つてきた。

「それでどうだね? わたしという男は合格なのかな?」

「合格……と、言われても……」

「不合格?」

「何について“合格”なのか」

「わたしと寝たいと思つてくれたかということだ」

息をのむ急展開。ローマ時代の貨幣について語りながら触れてきた男が、こんな直球を投げてくるとは。これは“メリハリ”というやつなんだろうか。

固まるおれに「どうした?」と訊く。

「いや、その……ずいぶんストレートに言つんですね」

「ゲイでも“ストレート”だつよ」ハリーはニヤリ、微笑みを浮かべた。

藍色の帷が降りた裏通り。周囲に人気はない。いるのは野良猫くらいのもので、これがボギーなら、バーグマンにキスしするシーンに相違ない。

ゲイの中のゲイとの間に沈黙が流れる。ローマンはおれのことをなんて言つてあつたんだろう。まさか『この子を食つちゃつていのよ』とか？ ハリーはおれに恋人がいることを知らないんだろうか。いや、例え知つていたとしても、そんなどは関係ないとか……何にしてもこのままじゃマズイ。効果があるかどうかわからないが、とにかく真実を告げてみることにしよう。

「あの……ハリー。おれには……その……パートナーがいるんです」「パートナーだつて？ 女性かね？」

保身を考え、わざわざ“パートナー”という性別を特定できない単語を選んだの。しかしこまさりストレートの振りをすることもできない。

「……男性です」

「そうか。もし女性と言つたら許さないとこがだつたが」  
聞いておれは首をそびやかす。危ないところだつた。

「だつたらなぜわたしとデートを？」

怪訝そうに眉根を寄せせる、ハリーの質問におれは答えられない。ほんと、なんでおれは彼とデートしてゐるんだ？ 寝る気もないのになぜ？

「パートナーか……ではきみはうわついてないというわけだな？」質問は続く。この答えはそう難しくはない。おれはうわついている。ビーチのレズビアンカップルに目をうばわれるほどだし。答えは簡単だが、この問いにも沈黙をもつてして答えるしかない。

「だつたら帰りたまえ、恋人が待つ愛の家へ、さあ」

追い払うように手を振つて言つハリー。怒らせた。そりやそうだ。逆の立場だつたらおれだつて腹が立つだらう。

「きみはわたしに対しても、きみのボーイフレンドに対しても、なによりきみ自身に とても失礼なことをしたんだ」

もつともだ。最後の“おれ自身に”ってところの意味はよくわからぬが、ハリーとポールに失礼なことだつてのは、よく理解できる。

おれは素直に謝罪し、それに付け加え、“もつと話が通つているものと思い込んでいた”と、言い訳もした。誠意ある謝罪、解説と弁明。こういうのは取引先とよくやる会話だ。相手が納得し、情状酌量してくれるまでなんとしてでも食い下がる。こんな道っぱたでこんな展開になるとは思つてもみなかつた。

おれの話を聞いたハリー、「きみは自分のアイデンティティに不安を覚えていいるというわけか」と、長い言い訳を集約して言つた。「ではひとつきみを安心させてやろう。きみはきみが心配しているような“オカマ野郎”などではないよ。きみはわたし私が知つているゲイの子たちとは、あまりにもかけ離れた性格をしている。あてはめるとすれば……そうだな、きみはわたしの部下たちによく似ているよ。闘争心が強く、男らしいプライドに満ち満ちている」

ガツン。やられた、本当にその通りだ。ハリーが言つたのは、“ディーンを形容するすべて”ではないが、まったくの外れというわけではない。この数時間ばかりのおれは確かに、今しがた言われたような奴だつた。おれはハリーのことを“ゲイである”というフイルターでもつて、物見高に見ていた。それを観察するのに忙しく、彼自身の気持ちというものを推し量ろうとはしなかつた。自分がなにをやつているのかも気づかず、失礼な質問を浴びせかけた。おれは見ていなかつた。彼のことも、自分自身のことも。おれは失礼なことをした。彼に対しても、自分自身に対しても。

黙りこくるおれに、ハリーは頭を振つてつぶやく。

「何と言つか……今夜のことはショックだね。ありていに言つて悲しいよ」

“悲しい”

こんな大人の男性が“悲しい”という単語を使

つたことに、軽い驚きを覚える。なんだかこいつちがショックだ。おれは彼を悲しませたのか。

「おれはてっきり……あなたを怒らせたものと」

「もちろん怒つてもいる」と、彼。「しかしそれだけじゃない。人間の感情はもつと複雑……いや、もつと単純なものだ。“怒り”の先にはいったい何があると思う？ それは“悲しみ”だ。“悲しみ”は“怒り”に姿を変え、“怒り”はさらに様々なものに形を変えることができる。“暴力”、“無視”、“怒つてない振り”というものもあるだらうね。わたしはそのどれも採用しない。ただ感じるんだ“悲しみ”を」

ハリーの話を聞きながら、おれはここにいるそもそもの原因に思いを馳せていた。それはポールとの喧嘩について。ポールはビーチでおれに腹を立てた。それは彼が“悲しみ”を感じていたからだ。自分の存在や気持ちを軽んじられたようで、寂しかったに違いない。そうした感情を彼は“怒り”という形で表現し、おれに不愉快な態度をとつてきた。おれはおれで、そのことに腹が立つた。ポールと同じく、自分の存在や気持ちを軽んじられたように感じたからだ。人間の感情は単純なもの。おれとポール、喧嘩の理由は單にどちらも“悲しかった”というだけのこと。そして今まで、おれは“感情を持った人間”の前に対峙している。それはおれに“悲しい”と言つてているのだ。

「すみません……なんと言つたらいいか……、その、今夜はお時間をおとらせてしまつて、どうも……」

さつきまでちゃんと話せていたのに、じぶりもじぶりになつてしまふのは、彼が“悲しい”と言つたからだ。“謝罪”ならば仕事で慣れているが、“ごめんね”と言つのは難しい。年上の地位ある男性に、友達に言つみたいに“ごめんね”と言つるのは。

「まったくだ、どう責任をとつてくれるね？」言つて腕を組むハリ一。

「責任……」

「一発殴られるか、それともキスされるか。どちらか選びたまえ」  
仕事の後にジムで何キロも泳いでいるような男に殴られたらどうなると思う? ここで潔く殴られてやるくらい、おれがマツチヨな男だつたらこんなことにはなつていない。キスかパンチか  
オーライ! へなちょこで結構! 痛い思いをして顔に痣ができるくらいなら、おれはヘラジカとだつてキスしてやる!  
決心を固め、キスをと申し出ようとしたその瞬間、ハリーは爆発したように笑い出した。  
「そんな真剣な顔をしてくれるな。からかっただけだ。すまんな、坊や。いや失礼」  
さも可笑しそうにハリー。からかわれるのは今日で一度目だ。どこまでが冗談でどこまでが本気なのか、彼といふとさっぱりわからない。  
「てつきつおれをぶつとぼしたいのかと」と、おれは肩をすくめる。  
「さつき言つただろ? „暴力”に訴えることをわたしは選択しないと」  
「せつかく覚悟をきめたのに」「ほんとに?」ハリーは眉を上げた。  
「いや、殴られるのは御免ですよ。でもキスなら……」  
そう言いかけるや否や、おれの唇は彼の唇によつて塞がれた。暖かい、豊かな唇。数時間前に会つたばかりの、ハリー・フランドルにおれはキスされてる。しかも思いつきり深く……。  
よし、正直に言おう。こんなに素晴らしいキスをされたのは生まではじめて。おれだつて経験は少ないほうじゃない。『キスがじょうずなのね』と女の子たちから言われたことだつて何度もある。だがこれはどうだ? 唇を奪われただけで、脊髄がメルトダウン。16才の女の子みたいにキスを受け、その感覚の途方もなさに、すべてを明け渡してもいいとさえ思つてしまつ……。たしかにそう感じたことを認めよう。目を開ける、その瞬間までは。目の前の顔は確かに魅力的だが、キスの後、情熱をさらにかきたてられる種

類のものではなかつた。彼はハリー・フランドル。おれのボーイフレンドじゃない男だ。

ふーっとため息をつき「とても我慢できなかつた」と、ハリー。

おれは頭をかき、「まいっただな……」と、つぶやく。「あなたは紳士かと思つたけど」

「紳士？　きみみたいな子を前にして、何もしないのが紳士だと言うのならば、紳士などクソクラエだ！」

ハリーは笑つた。それはまるでサンタクロースみたいな大きな笑い。最高だ。彼はなんて素敵なんだろう。おれは素直にそう思つた。ハリーに憧れを抱くことはできる。しかしボーイフレンドにしたいとは思わない。それはおれがゲイじゃないからとか、そういうことではない。おれはポールが好きなのだ。

人間の感情は単純なもの。その単純さを、おれは性的アイデンティティの問題にすり替えて、とても複雑化してしまつた。掘り下げ果てた後に発見する、単純な感情。“嬉しい”“悲しい”“好き”“嫌い”。それはいつたいどこからやってくるのか。なぜポールを愛せてハリーでは駄目なのか。どうしておれはポールを好きになつたのか。そんなことおれにもわからない。これは頭で理解することじやない。今すぐにポールに会いたい。会つて抱きしめたいと強く感じるのには理屈じやない。

他の男とデートをしたが、結果的におれはポールへの愛を再確認させられた。こうなることをローマンは予測していたんだろうか。それともそれはまったくの偶然で『この子を食つちやつていのよ』とかいう話だつたとか？　もちろん彼の弁は以下の通り。

「そうよ『食つちやつていのよ』って言つてあつたんだけどね」言つて、スツールの上で長い足を組み替える。ここはヴィレッジにある行きつけの飲み屋。バーテンダーはゲイの若者。店のしつらえはヴィンテージと無縁。大人の隠れ屋も悪くはないが、今のおれには敷居が高い。イメージの椅子とベネチアングラスのライト。現代モダンが安心空間だ。

「残念だわ。どんな一夜を過ごしたか聞きたかつたけど」

悪魔が何か言っている。呪いの言葉を。聞くな“ティーン”。もづなにも聞くな。彼の言つことなど何も従うべきじやない。

「でもそつはならないだうなつて思つてはいたわ」

「そりやそつわ、おれにはポールが」

「なに言つてんの。あんたはテンプレーション・アイランドの脱落組だつて言つてるでしょ。そつじやなくつて、あたしが言つてるのはハリーの方」

「彼？」

「あの人、とても好みにうるさいのよ。そう簡単に男の子を食つちやつたりはしないわ。ハリーのキスはすつごく素敵つて話だけど、実際に試した子はいないのよ。そういう伝説だけが残つてて、それだけ選り好みが激しいつてわけ。このアタシですら、頬以外のところにチューを貰つたこともないんだから」

「へえーええ！ そつなのか！」

「あらなによ、その“へえーええ！”は

「ふふふン」

「なによ、その“ふふふン”は」

「彼のキスは噂通りだつて断言するよ

「え？……なにそれ？ うそつ！ いや……ほんとこ？..」

訝しげにおれを見るローマン。その瞳を勝ち誇つたように見返すおれ。ローマンが次に発した金切り声で、おれは自分の勝利を知つた。

「なによつ！ あんたゲイじゃないんでしょ！ あたしと交替しさいよ！ 憎いつ！ ポールにバラしてやるからつ！」

怒りに頬を紅潮させる彼を見るのは気分がいい。これでちょっとは溜飲が降りた。これは“闘争心が強く、男らしいプライドに満ちている”おれならではの爽快感。ハリーが言つたような性質をおれは確かに持つていて、その事実については積極的に認めたいと思う。あの日、ハリーから学んだのは“素直さ”だ。彼は自分のゲイを

認め、自分の感情を認めている。人生をややこしくする」ともなく、ただ素直に己を見つめ、それを表現している。

そんな大人、ハリー・フランドルはおれにキスをしたいと思い、そしてそれを実行した。背骨が溶けるような口づけであっても、おれにはさほどの意味はない。おれにとつて“意味ある唇”はただひとつ。ときに愛をささやき、ときに罵詈雑言をまくしたてるそれに、おれはキスをする。

おれはディーン・ケリー、28歳のアメリカ人男性。性癖については現在のところ未確認。ただひとつ言えるのは、おれはポールが大好きで、それについてはトイレットペーパー一枚ほどの異存も挿めないということ。

ゲイのポールはストレートのおれを愛し、ストレートのおれはゲイのポールを愛した。この一文についての矛盾点はいくらでもあげられるが、そうすることはあまり重要じやない。おれの人生で重要なことは、ポールにキスをすること。文法の誤りを見つけ出すのは頭の外につっちやつておけばいい。それともうひとつ、おれの人生で重要なことは ローマンの言うことに容易く従わないこと！。

素敵なキスと引き換えに得た教訓を、油性のペンで心のノートに書き付ける。“素直さ”を学んだおれではあるが、こればかりは警戒レベルをAにした方がいい。彼を信じたばかりに、素敵なバーで高級な酒をごちそうになり、指輪を褒めてもらつて、素晴らしいキスを受けてしまつた。それのどこがいけないのかつて、文章から誤りを見つけ出すのは些か面倒なことだ。この体験も心のノートにしまいこみ、おれはローマンに手を見せる。

「「」の指輪、何かわかるか？ これは“1シェケル”って言って、ローマ時代のコインなんだ。つまりこれはキリストの手のなかにあつたかもしれない貨幣で……どう？ ロマンティックな話だと思わないか？」

今夜もまた裏通りは藍色に色を替える。落日は紀元一世紀よりも前から毎日繰り返され、それは当たり前だけどロマンティックな話

だとおれは思う。恋人たちの嘗みもそれに同じ。今夜もまたおれはポールにキスをし、それは今となつては当たり前で、だけどすゞくロマンティックな話だとおれは思つんだ。

End.

### HPS-08／おまけのページ

本作品には別バージョンのオチが用意してあります。こちらはバラレルワールドの一環とお考えのうえ、本シリーズとは別モノとご理解頂けますよう、お願ひ申し上げます。以下URLに掲載のストーリーにはハリーとティーンの濡れ場が書かれています。つまり浮氣です。そういう場面を読んでしまったら、いくらバラレルワールドだと言わても、これまでのイメージが壊れるじゃないか勘弁してくれよと思われる場合は、どうか以下の内容をお読みになりませんようにと、ご注進をさせて頂きります。

<https://jono-web.fc2.com/content/2/NYC/EP08-04.html>

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。  
もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「Hピソード9：バレHの嵐（http://nico  
de-syosetu.com/n6545c/）」に続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6439c/>

ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード8：ゲイ入門！（Secret）

2011年8月15日03時25分発行